



CASE STUDY

失敗と向き合う 高校事例

失敗は挑戦の証し。失敗から学べることもある。

そうした考えから、「失敗(=挑戦)」を推奨する取組や失敗を許容する学校づくりを実践している学校を紹介します。

失敗と向き合ってきた先生や生徒の言葉は、読者の先生方のヒント、そして勇気となるはずです。

CASE
1

失敗を恐れず踏み込み、振り返ることで
学びを深める、「失敗を共に称え合う学校」へ
隠岐島前高校(島根・県立)

CASE
2

自己完結せず他者と共有することで、
失敗は大きな価値を発揮する
筑波大学附属坂戸高校(埼玉・国立)

CASE
3

「想定外」こそ成長のチャンス。
主体性を引き出す商品開発への挑戦
倉敷鷺羽高校(岡山・県立)

CASE
4

生徒と教員による座談会をレポート
不測の事態から生徒を遠ざけない。
エラー&ランで育つ「挑戦できる力」
FC今治高校 里山校(愛媛・私立)

失敗を恐れず踏み込み、振り返ることで 学びを深める、「失敗を共に称え合う学校」へ

隠岐島前高校(島根・県立)



校長
伊藤尚子先生



コーディネーター
宮野準也さん



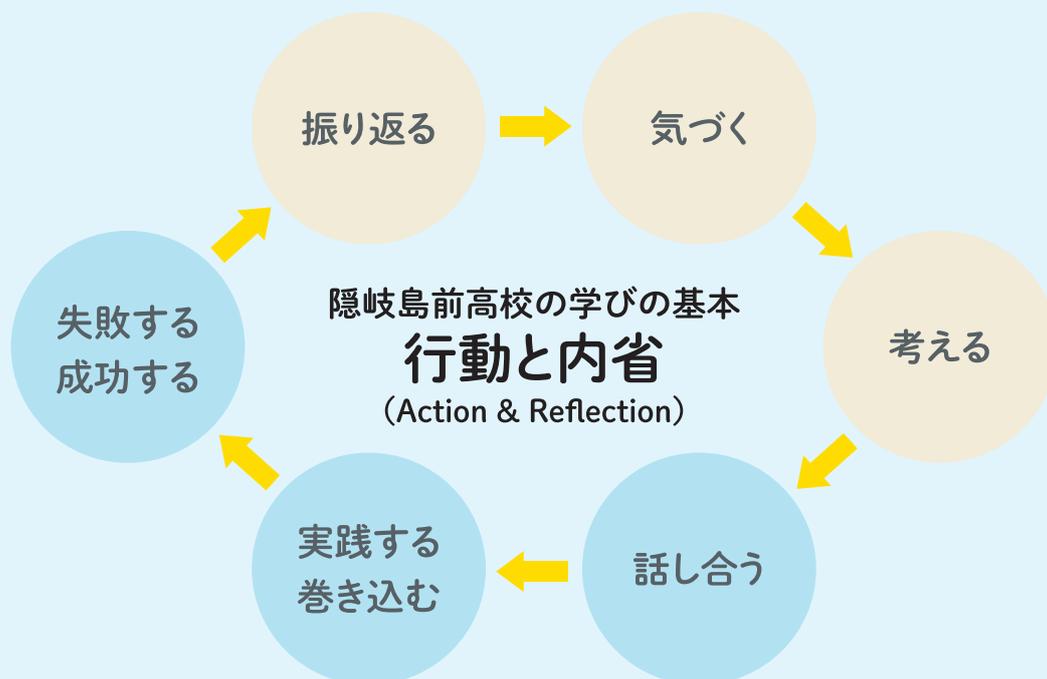
地域共創科主任
吉岡裕司先生

掲げる学校経営スローガンは 「失敗を共に称え合う学校」

地域をフィールドに、地域の人々と生徒がプロジェクトを共創する探究学習に取り組んできた島根県立隠岐島前高校。全国から生徒を募集する「島留学」により、生まれ育った環境が多様な生徒が共に学んでいる。同校では、2022年度より「失敗を共に称え合う学校」を中期の学校経営スローガンに掲げ、失敗を恐れずに踏み込む文化を醸成してきた。スローガンに掲げた背景について、同校でコーディネーターとして

生徒の学びや教員の授業づくりに伴走する宮野準也さんは、「学校経営会議で、隠岐島前高校が進化し続けるためには何が必要かを話し合なかで生まれたもの」と説明する。

隠岐島前高校と言えば地域課題探究の先駆者であり、生徒たちは地域という豊かなフィールドで活発にチャレンジをしてきた。一方、「活動が活発な反面、アクション同士のつながりが希薄だったり、活動の振り返りが十分でなかったり…という弱みもあった」と課題を指摘する。生徒の強みを伸ばし弱みを補うために必要なことを突き詰めた末に至ったのが、「踏み込み」と「振



「振り返り」を両輪で回すことが大事だ、という結論だった。「踏み込みと振り返りを繰り返すことで、学びの質が高まっていくイメージ。大事なのは、踏み込んだ結果が成功であれ失敗であれ、しっかりと振り返ること。失敗を恐れて躊躇するのではなく、踏み込んだことを互いに称え合おうというメッセージを込めて、このスローガンを掲げた」と言う。

スローガンを掲げただけでは意味がない、文化として浸透させようと、宮野さんをはじめ教員ら4名からなる「失敗共創プロジェクトチーム」が発足。フィンランドでは10月13日が「失敗の日」とされていることを受け、隠岐島前高校でも同日を「失敗の日」と定め、学校行事として取り組むこととなった。

教員も生徒も失敗を称え合う 「失敗の日」を開催

フィンランド大使館からのビデオメッセージで幕を開けた第1回の「失敗の日」。午前通常授業で、教員たちは「失敗おめでとう」とプリントされたおそろいのTシャツを着て授業に臨んだ。失敗共創プロジェクトチームから教員に出されたのは、「授業の導入で、自身の失敗談をしてください」というお題。これが盛り上がり、なかには授業が失敗談だけで終わった教員もいたという。「先生たちが失敗談をイキイキと話す姿が印象的でした。倫理の先生の恋愛の失敗談を聞いたことで、倫理の授業の受け止め方が変わったという生徒もいたりして。先生の意外な一面が垣間見えて、生徒が先生を、先生としてではなく

一人の人として受け取った時間になりました」(宮野さん)

続く昼食は「踏み込みランチ」と称し、各学年の生徒と先生の4人1組で食事をとる形式に。普段は関わることの少ない異学年の生徒や先生との交流は新鮮だったようで、生徒からは「話したことのない先生と話せたのが良かった」「先生との距離が近くなった」という声が多数寄せられたという。

さらに、昼休みには失敗共創プロジェクトメンバーの教員が失敗談を語る「失敗ラジオ」、午後には同校の卒業生であるタレント・井手上 漠さんの「失敗講演」が行われた。講演後には、生徒と教員が過去の失敗経験を語り合い称え合うグループワークを実施。失敗を称え合う先にある「未来に対して失敗を恐れずに踏み込む」という本来の目的を達成するため、最後は一人ひとりが「自分がこれから踏み込みたいこと」を宣言した。

グループワークの企画・運営には、生徒会のメンバーも参画した。各グループのファシリテーターは3年生の生徒が務め、未来に向けた「踏み込み宣言」がしたいというのも、生徒から出た意見だ。「最後にみんなで円陣を組んだときに、普段はおとなしい印象だった生徒会の生徒が先陣を切って大きな掛け声をかけていて、思い切って踏み込んだんだなと嬉しく思った」と振り返る。

やりたいことを口にする、 応援してくれる人が現れる

第2回(2023年度)、第3回(2024年度)と、

「失敗の日」の取組は企画のリニューアルを重ねて継続中だ。生徒が自分の好きなものについて語る「偏愛授業」でタレント・西野亮廣さんへの思いを表現した生徒が、その後、交渉を重ねた結果、翌年の第3回に西野さんの講演が実現するなど、生徒の踏み込みが生徒自身の力によって実ったケースも。また、出身地(島根県浜田市)に伝わる石見神楽と隠岐島前に伝わる島前神楽が共演する舞台を作りたいと踏み込

み宣言をした生徒が、地元住民をはじめさまざまな人の協力を得て舞台を実現させたこともある。

「結果的にはやりたいことが実現できた生徒も、その過程ではうまくいかないことや失敗をたくさん経験し、そのたびに振り返って次の踏み込みにつなげていった。自分のやりたいことを口にするだけで、応援してくれる人が現れる。そして、言ったからには実現しないと…という良いプレッシャーが生まれる。自分の踏み込みをみんなの前



1

❶過去の失敗経験を語り合い称え合うグループワークの様子。最後には「踏み込み宣言」をした。❷フィンランド大使館からのビデオメッセージが流れ、一気に沸く会場。❸地域の人も交えた踏み込みワークショップの様子。❹おそろいの「失敗おめでとう」Tシャツに身を包む教職員たち。



2



3



4

で宣言することの意味を、感じてくれたのではないかと生徒の姿から推測する。

第3回の「失敗の日」は、企画・運営を生徒の有志チームに任せたものの、「前例踏襲感が強く、失敗の日を失敗した。私たち大人の委ね方が雑で、生徒が戸惑ってしまった」と宮野さん。一方、「失敗の日自体、踏み込みと振り返りで改善していくもの。まず、大人が手放して、生徒主体でやってみると踏み込んだことに価値がある」と前向きだ。中心となった生徒たちとは、振り返りもした。「生徒たちからは本音がポロポロ出てきて、悔しい、今年の失敗を活かして来年はもっとがんばりたい、と。生徒に任せつつ、いかにパスを出すか、いかに伴走するか、私たち大人の探究も続く」と次回に向けて意欲を見せる。

日常のシーンで体現・発信することが、文化の浸透につながる

「失敗の日」は年に1回のイベントであり、失敗

を恐れずに踏み込む文化の醸成は、これだけでは難しい。さらに、離島にある隠岐島前高校には若い教員が派遣されることが多く、全教員の約3分の1が入れ替わる年もあるほど異動者が多いという課題もある。宮野さんは「文化の浸透において大事なものは日常のシーン。踏み込みや振り返りにこだわる学校なんだということが自然に感じ取れるよう、意識的に行動・発信している」と言う。

失敗の日に取り組んだ1年目は、イベントが盛り上がった勢いで、「それって踏み込んでないじゃん?」「もっと踏み込もうぜ!」といった会話が職員室でも頻繁に交わされていたという。一方、教員やスタッフの入れ替わりがあるなか、熱量は次第にトーンダウンしていった。「『踏み込みって何?』という他校から赴任した先生にまで文化を伝え、浸透させるためにはどうしたらいいか。考えた結果、自分自身が積極的に発信していくことが大事だと思うようになった」と言う。例えば、生徒が

隠岐島前高校が目指す教師のあり方





1

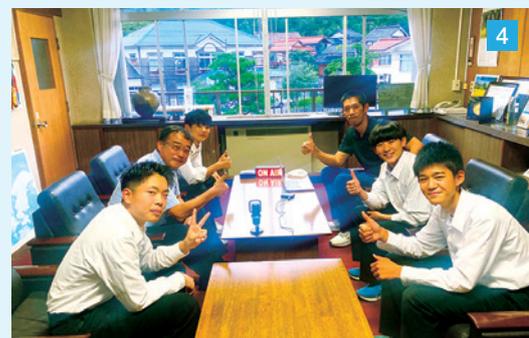
112「踏み込みランチ」の様子。普段は関わることの少ない、各学年の生徒と先生の4人1組で、校内の思い思いの場所で昼食をとった。113隠岐島前高校の卒業生であるタレントの井手上 漠さんがサプライズで登場。自らの失敗経験を語った。114失敗ラジオの収録風景。



2



3



4

失敗したシーンに遭遇すれば「失敗、おめでとう!」「その踏み込み、いいね!」と声をかけたり、スタッフからミスを報告されたときには「失敗を報告してくれてありがとう」と返したり。失敗を咎めるのではなくポジティブに捉える学校であること、スローガン通り「失敗を共に称え合う学校」であることを、学校経営会議のメンバーや管理職といった影響力のある立場にある人が体現し、発信することが、文化の浸透には欠かせないのではないか。宮野さんはそう考え、実践している。

失敗を称え合う関係性には、心理的安全性が不可欠

失敗を恐れずに踏み込む文化は、校内にどれほど浸透しているのだろうか。学校の空気の

変化について、同校に赴任して6年目を迎える吉岡裕司先生は、「生徒間でも教員間でも、誰かがやりたいと言ったことに対して、やってみればいいじゃん、と返す空気がある」と言う。

「周囲の反応がポジティブなので、みんながやりたいことを内に秘めずに口に出せるんだと思います。失敗を称え合える関係性の前提として、生徒も教員も自分を開示することが大事だと思うんです。相手のことを知りたければ、まずは自分を開示しないといけません。本校では、自らをさらけ出せる、出そうとする、そんな雰囲気があると感じます」(吉岡先生)

現在、地域共創科3年生の担任を務める吉岡先生。生徒から「お互いに何を思っているのかもっと知りたい」という声が挙がり、終礼で一

人ずつスピーチをすることになった。2年次の3学期から始めて数カ月が経ち、「生徒にとってクラスが、安心できる場になっている」と感じている。「日々感じていることや好きなものについてお互いに共有すること、つまり、自分を知ってもらい相手を知ることが、一人ひとりの気持ちを楽にするんだと実感した」と吉岡先生。突拍子のないことをやりたいと言っても否定されない安心感がある一方、その関係性に甘えてはいけないうこと、気の置けない間柄であっても丁寧なコミュニケーションが大切だということも、生徒には伝えている。

実は吉岡先生も、終礼のスピーチで自分自身の経験を開示したことがある。語ったのは、地域の小学校で理科の実験講座をやった際、「割れないシャボン玉」を作るはずが割れ続け、小学生に同情された…という失敗談だ。

「私にとっては心に引っかかっていた失敗だったんですが、生徒に話し、生徒がいい失敗じゃんと言ってくれたことで、なんだかスッキリしました。教員は失敗したらダメな仕事だと思込みがちで、つい生徒の前でバリアを張ってしまうんですよ。でも、それでは相手も自己開示してくれません。自分が本音を話すこと、自分をさらけ出すことで、生徒も本心を見せてくれるのだと思います」(吉岡先生)

転ばぬ先の杖は渡さず、 生徒自身に試行錯誤させる

今春、隠岐島前高校に校長として赴任した伊藤尚子先生も、同校の「じゃあやってみます

3回の「失敗の日」で実施した主な企画 /

- 生徒による踏み込み授業「偏愛授業」
- 教員の失敗を恐れない踏み込みチャレンジ
- 地域の大人による失敗発表会
- 未来への踏み込みワークショップ
- 失敗の価値を考えるワークショップ
- 踏み込みランチ／失敗ラジオ

か、という雰囲気に驚いた」と言う。

「譲れない部分はあっても、世の中の変化に合わせて、学校も変わっていかないとはいけません。しかし、多くの学校には、今までこうしてきたから今回も…という前例踏襲の文化が根強く残っています。本校には若い先生が多く、コーディネーターや寮のハウスマスターなど教員以外のスタッフも多く、多様な意見が出て、かつ、機動力が高い。新しいことに挑戦し続けようという空気をひしひしと感じています。現状維持は後退であると肝に銘じて、失敗云々ではなくとりあえずやってみる。これを私自身の踏み込みとしたいと考えています」(伊藤先生)

また、「これまで教員は、生徒が失敗しないよう、こうしたらいんだよとルールを敷いて道筋を示してしまいがちだった」と伊藤先生。「これからの時代は、時に待ち、時に導きながら、失敗も含めて生徒自身に試行錯誤させることが大事なのではないか」と提議する。これを受けて、「こちらが準備した道を生徒がその通りに歩むことで安心していただけなのは、自分たち教員だと気づいた」と吉岡先生。きっかけとなったのは、ある生徒のひと言だった。

数年前、3年生の担任だった吉岡先生。なかなか進路が定まらない生徒に対して、進路の情報を集め、提案するなどして熱心にサポートしていた。しかし、ある日、その生徒が「進路を決めないことを決めた」と宣言。一体どういうことだと驚いた吉岡先生が、突き詰めて考えて行き着いたのが、「生徒のために良かれと思ってやってきたが、実は自分が安心したいからやっていたことであり、生徒のためになってはいないのではないか」という気づきだった。その生徒は、最終的に自分で進路を決めた。「生徒が転ばないように

と先回りして準備をしていたけれど、違ったなと気づかされた」と吉岡先生。そこからは、「探究学習でも進路選択でも、自分の焦りから生徒を急かしたり誘導したりしないよう、生徒が自ら納得感をもって次に進めるよう、待つことを意識するようになった」と言う。

失敗は世代を越える！ 生徒も教員も踏み込む学校に

生徒の踏み込みを後押しし、実際に多くの生徒がさまざまなことにチャレンジする姿を見て、



1



2



3



4

1 上半期の踏み込みを振り返り、共有するワーク。2 「偏愛授業」でタレント・西野亮廣さんへの思いを語る生徒。3 西野さんの講演を実現するため、クラウドファンディングに挑戦し、達成。4 翌年の「失敗の日」に実現した西野さんの講演の様子。

「負けたくないと思った」という吉岡先生。昨年、JICA(国際協力機構)が主催する教師海外研修に応募し、夏休みの10日間をラオスで過ごすという「踏み込み」を実践した。帰国後は、学園祭や授業の中で、ラオスでの経験やラオスについて話をする機会が何度かあった。「大人が勇気を出して踏み込む姿を見て、生徒たちも何かしら感じてくれたらと思う」と期待する。

学校の中で失敗を許容しにくい背景には、保護者からの目に見えぬプレッシャーもあるだろう。我が子の未来への漠然とした不安の矛先が、高校や教員に向けられることも往々にしてある。「保護者vs学校」という対立構造ではなく、「子どもを真ん中に置いた共創パートナー」という関係性を構築することが、「失敗を共に称え合う学校」の実現には不可欠である。そう考えた宮野さんらは、今年度より新たな取組をスタートさせた。その名も「保護者のはじまりの会」。1年生の保護者を対象に、入学式の1週間後にオンラインにて開催した。

同校では島前地域外から通う生徒は寮生活をしており、「保護者自身も、我が子を離島の高校に送り出すという大きなチャレンジをしている」と宮野さん。「入学直後は、生徒だけでなく保護者にとっても大きく環境が変化する時期。この時期に改めて隠岐島前高校の保護者としてのマインドセットをすることが大事だと考えた」と言う。会では、今の心境を互いに共有する時間をもったうえで、保護者としてどうありたいかをそれ

生徒の声(アンケートより)

■今までは「踏み込まない＝停滞」と考えていたが、踏み込んでマイナスになったとしてもそこから学ぶことがあるのだから、「踏み込まない」という選択をすることは、学びのチャンスを失うという意味においてマイナスだと思うようになった。

■自分の失敗を語ることによって、失敗もある意味成功だったことに気づけて良かった。

■今まで失敗は悪いものだと思っていたけど、失敗が悪いのではなく、それを次に活かさないことが悪いと思うようになった。

それぞれが考え、最後に宣言した。「保護者からも好評で、共創パートナーとして共に歩み出す一步になった」と宮野さん。今後は、保護者も含めた「失敗を共に称え合う学校」づくりを進めたいと、意欲を見せる。

「失敗を共に称え合う学校」をスローガンに掲げ、折に触れて「失敗」の価値を問うなかで、今、「失敗は世代を越えられるのでは？」という仮説が、宮野さんの中で立っていると言う。

「先生たちが過去の失敗談を楽しそうに話す様子を見て、失敗は世代を越えて対話のテーマになり得るのではないかと考えるようになりました。社会の第一線で活躍している人にも失敗はあるはず。今後は、高校という枠を越えて、失敗をキーワードに地域や社会までつながりを広げていけるといいなと考えています」(宮野さん)

自己完結せず他者と共有することで、 失敗は大きな価値を発揮する

筑波大学附属坂戸高校(埼玉・国立)



2024年度卒業生
佐藤優磨さん



3年生
大島章護さん

先生の言葉に背中を押され、 失敗を共有するイベントを開催

筑波大学附属坂戸高校では、隠岐島前高校の「失敗の日」にならい、生徒主体で独自の「失敗の日」を実施している。45代生徒会長で現在は秋田大学1年生の佐藤優磨さん、佐藤さんと共に生徒会に所属していた現・3年生の大島章護さんは、「自分たちの代で、何か大きなことをやりたいと思っていた」と振り返る。

佐藤さん、大島さんらの背中を押したのが、「今年はなにか面白いことやらないの?」という、本弓康之先生(現・副校長)のひと言だった。「何かやりたいという気持ちはあったものの、具体的に何をどこまでやっていいか掴めていなかった。そんなときに先生からやったらいいじゃんと言われて、あ、やっていいんだと気づいた」と大島さん。調べるなかで隠岐島前高校の取組を知り、「いい意味で失敗する機会をたくさん与えられてきたうちの学校でもできるんじゃないか、やってみたい、と思った」と言う。

また、佐藤さんは、「筑波大学附属坂戸高校は、授業でも課外活動でも探究活動に積極的に取り組む学校」と説明。「探究では成功例が目立ちがちだけど、成功には失敗がつきもので、

裏には失敗もたくさんある。その失敗をただ内省して終わらせるのではなく、外部に公開して評価やフィードバックをもらう場をつくりたい、失敗の日をその機会にしたいと考えた」と振り返る。

生徒の自主性・主体性を重んじる同校では、「先生たちは基本的にノータッチ」と佐藤さん。一方、「生徒だけでは解決できない課題に直面したときに相談すると、真摯に向き合い、アドバイスをくれた」と言う。

失敗を解放することで前進し、 他者の失敗に勇気づけられる

こうして2023年12月に「失敗の日」と銘打った一般公開型のイベントを初開催。同校の生徒に加え、他校の生徒や受験生とその保護者らも参加した。柱はポスターセッションで、プロジェクト型の自主活動に取り組む生徒らが自らの失敗やそれを乗り越えた過程などをポスターにまとめ、来場者に説明して意見をもらう場とした。具体的には、「代替わりの際の引き継ぎがうまくいかず、団体の活動目的や理念がすり替わってしまった」「報・連・相が不十分で、取材を申し入れたが断られてしまった」などの失敗事例が見られたという。

翌2024年には、本来の失敗の日である10



①自主活動団体の広報メンバーが失敗談を語ったトークセッション。②校則について、受験生や保護者を交えてディスカッションする企画も開催。③自主活動(T-GAP)で起きた失敗やそれを乗り越えた過程をポスターにまとめ、来場者に説明。



月に第2回を実施。いずれの年も、実施後には生徒会のメンバーで振り返りを重ねた。「失敗について話すことで、自分の中で溜め込んでいたものが解放されて心のもちようが楽になり、次のステップに進みやすくなったのではないかと感じた」と佐藤さん。また、大島さんは、「失敗の日は、生徒、特に下級生にとって、勇気づけられるイベントになったのではないかと続ける。「優秀に見える先輩たちも、みんなと同じような

失敗をしてきたことや、それを乗り越えてきたプロセスを知ること、先輩たちは特別でなく自分たちと同じなんだ、自分たちにだってできるんだという気づきや励みになったと思います」(大島さん)

失敗の日は同校の生徒に違和感なく受け入れられた背景について、佐藤さんは「本校には、失敗は悪いことではない、とりあえずやってみよう、という風潮がある」と言う。

「根底には、世の中には正解がなく、物事に取

り組む過程で何を得るかが大事…という考え方があると感じます。また、自己をオープンにしている先生が多いことも影響していると思います。だから、失敗に対する恐怖心はあまりありませんでした。授業中も、みんな間違いを気にせず手を挙げたり意見を言ったりしていましたね。とはいえ、人はつい成功談を話したくなるもの

の。その反面で失敗を誰かと共有したいという思いも抱えていると思うので、失敗の日はとても良い機会になったと思います」(佐藤さん)

同校では今後も、失敗の日の取組を継続予定だ。「本来の目的と理念は受け継ぎつつ、型にとられず、自分たちらしい失敗の日をつくってほしい」と大島さんは後輩たちにエールを送る。

「想定外」こそ成長のチャンス。 主体性を引き出す商品開発への挑戦

倉敷鷺羽高校(岡山・県立)



ビジネス科
石橋毅士先生

うまくいかないからこそ、 「なんとかする力」が身につく

倉敷鷺羽高校のビジネス科ならびにビジネス研究部(部活動)では、「こじまっちゃんぐ」と名づけた生徒主体の地域活性化プロジェクトに取り組んでいる。生徒が間に入って地元・児島の事業者同士をマッチングし、観光資源を活かしたマイクロツーリズム事業や地元の食材を使った商品開発を実現。高校生が企画・開発に携わる商品を全国から集めて販売するマルシェ

の開催などを通して、その活動は県外にまで広がっている。

「こじまっちゃんぐ」は、「課題解決型商品開発」として設計されたプロジェクト。利害が対立する当事者を意図的に組み込み、「生徒にあえて失敗や想定外の経験をさせるよう設計している」と、ビジネス科の石橋毅士先生は言う。

「いくら計画を立てていても、いざ動いてみるとうまくいかないことが次々と起こるもの。事業者間で板挟みになることもあるでしょう。想定外の出来事や壁に直面することで、自分でなんとか

する力や失敗を次に活かす力が身につきます。失敗を乗り越える過程が学びになり、生徒自身の成長につながると感じています」

また、「こじまっちんぐ」の活動ではチームワークを重視し、生徒は5人程度のグループでプロジェクトを動かしている。

「生徒たちは、それぞれの得意なことを活かせるよう役割分担し、互いにサポートし合いながらプロジェクトを進めています。うまくいかないときは、すぐに教員を頼るのではなく、まずはチームのメンバーと課題を共有し、解決策を考えます。時には、他のグループに意見を求めることも。自分だけで抱え込まないためにも、気軽に相談できる関係性づくりを大事にしています」

「こじまっちんぐ」などの取組を通して、生徒には「人とは違う視点で考えて、課題解決ができる創造力と主体性を身につけてほしい」と石橋先生は言う。

「AIが仕事を奪う…などと言われるなか、生徒にはAIにはない創造力と主体性を身につけてほしいと考えています。こちらが準備をしてあれこれ指示を出してしまうと、生徒は言われたことをやるだけで、自分の頭で考えて創造する力も主体性も育まれません。児島にどのような課題があるか、その課題を解決するために何がやりたいか、自らアイデアを考案し、失敗も含めて試行錯誤することで、課題が自分ごとになり責任感が生まれるのです」



1



2



3

1 地元のコーヒーショップ「KOJIMA FOK COFFEE」とのコラボ商品企画案について発表する生徒。2 役割分担をしつつ、協働してプロジェクトに取り組む生徒たち。3 「岡山県展示大商談会フードマッチングフェア」に出展し、「くらしき たこSUNカレー」「たこやき Beans」など開発に携わった商品を紹介。

CASE

4

生徒と教員による座談会をレポート

不測の事態から生徒を遠ざけない。 エラー&ランで育つ「挑戦できる力」

FC今治高校 里山校(愛媛・私立)

不満で教員は動かないと知り 気づくと不満は「企画書」に

2024年4月に新設された、FC今治高校 里山校(以下、FC今治高校)。ロールモデル不在の時代に、主体性をもって困難に立ち向か

い、次の時代を切り拓く人材を輩出することを目指して、実践重視のカリキュラムを設計している。学びの姿勢としてモットーにしているのが、失敗を恐れずに学びへとつなげる「エラー&ラン」だ。やってみたいとひらめいたことは、まずやってみる。失敗でも成功でも、その結果を素



校長
辻正太さん

2年生
井出光波さん

2年担任・数学担当コーチ
宮合拓也さん

2年生
藤本健汰さん

2年生
菊地春海さん

直に受け止め、自分なりの意味や、次につながる気づきを得ることを大切にしている。

どのような環境が、そのエラー&ラーンの循環を促すのか。1期生である現2年生の生徒たちと、教員の方々(FC今治高校では先生ではなく

「コーチ」と呼ぶ)に語り合っていた。

聞くと、開校からの1年間はエラーの連続だったという。それだけ、生徒もコーチも、うまくいかわからないことに挑戦してきたのだろう。1年の間に、部活やコミュニティの立ち上げ、ボランティアや地域活動など「これをやりたい」という声が、徐々に、生徒一人ひとりからあがるようになった(▶Keyword①)。しかし、それらの活動をコーチが逐一管理・指導しているわけではないので、蓋を開けてみると想像以上にうまくいったケースもあれば、大失敗するケースも。

もちろん、開校当初すべての生徒に、やりたいことがあったわけではない。校長の辻 正太さんによると、何をしたいのか戸惑う生徒や、不平不満をもらす生徒もいたとか。「校長室を開放しているので、生徒たちが入ってきて、学校や寮についてあれこれ文句を言ってきたこともありました。でも私は『そうなんだ』と返し、それ以上のことはしなかった」と辻さん。不平不満を言うだけでは何も変わらない、「こうしなさい」とコーチから指示することもない、と暗に伝わったのだろうか。次に校長室を訪れた生徒たちは、なんと、みずから企画書を書いてきたそうだ。やりたいことがあるが、どうしても自力ではできない、と言われれば、コーチはできる限り協力する。実際に、生徒の藤本健汰さんが「オンラインコミュニティを立ち上げたいので8000円出資してほしい」と直談判したところ、辻さんは快諾した。そのうえ、藤本さんのほうから相談してこない限り、活動報告を求めず、口を出すこともなかったという。

「学園長の岡田武史さんからは常々『子どもた

Keyword ① /

「やりたい」は生徒から

試行錯誤の1年間で生徒にも変化が。
自発的に、さまざまなコミュニティで活動し出す。



学校を飛び出して地域で実践する「探究ゼミ」や自分の興味関心をベースにしたマイプロジェクトのほか、企業活動や地域活動、ボランティアなど、生徒の主体性に任せてさまざまな形、時間で、やりたいことができる。入学当初は「やりたいことがわからない」とモヤモヤしていた生徒も、周りの同級生の活動に触発されてか、徐々に自分から「やりたい」と声をあげるように。写真(上)はFC今治高校里山校の有志が能登で復興支援のボランティア活動を行った様子。井出光波さんも参加した。

ちは育つ力をもっているのだから、大人はそれを邪魔するな』とされています。当初は、生徒たちの状況をもっと把握し、支援したほうがいいのでは、という議論もありましたが、不要な助け舟を出す頻度は徐々に減っていきました」(辻さん)

エラーで気づく、行動を阻む箱。 その箱から出るまで

生徒たちに自発的な行動が増えていったのは夏休み明けごろからだそう。「同級生から刺激をもらったり、長期休みに体験したことが意欲になったりして、行動が加速していったのでは」と2年担任の宮谷拓也さんが語る。

その言葉に、生徒の菊地春海さんがうなずく。入学当初は、やりたいと思ったことをすぐに行動に移せずにいた菊地さん。もともと関心のあ

った投資をテーマに投資部を立ち上げたものの、思うように進まなかった。そんなエラーを経て「周りの人に好かれないという気持ち、行動のブレーキになっていることに気づいた」と語る。あるとき、同級生の前で、金子みずぶさんの「みんな違って みんないい」のフレーズを借り「みんな違って どうでもいい」と、自分の思いをプレゼンした。みんな違うのだから、みんなに好かれる必要はない。思いを打ち明けたら、同級生は面白がって受け入れてくれたのだそう。「自分の素をさらけ出しても大丈夫という安心感が生まれて、どんどん挑戦していこうと思えた。同時に、みんなのことがもっと好きになりました」と菊地さんは言う。

何が、その生徒のブレイクスルーにつながるかはわからない。だから「コーチにできるのは、そ



のきっかけになるかもしれない出会いや、視座を変える機会を提供すること」だと辻さん。「日本一出会いの多い学校」にしたいと掲げる(▶ Keyword②)のも、そうした理由からだ。出会いを経て、自分一人では起きないような心の揺れが起こり、次の行動につながっていく。

エラーが“言葉”を育てる

生徒たちの話からは、あえて「振り返り」という形をとらない日常的な場面でも、自身の失敗体験から、何らかの学びや教訓を得ているように思えた。なぜそれが自発的に起きるのだろう。

生徒の井出光波さんは、能登での災害復興支援ボランティアのほか、地域に根ざしたボランティア活動を数々行った。その経験も経て「うまくいなくて一回止まることはある。でも、そこで諦めるから『失敗』になるのであって、それを何かしら活かすことができれば失敗ではない」と考えている。“エラーが起きた時点で終わりではない”という前提があるから、うまくいかなかった経験に、自分なりの意味が生まれている。

「エラーが起きるのは『このやり方ではうまくいかない』ことのサインだと思う。だから自然と『では、どうすればいい?』と考えるようになる」と井出さんは続ける。「以前、妹に前髪を切ってもらったら、思ったよりも切られてしまった」と身近なエラーを例に出しながら、「そういう経験からも『人に頼むときは、相手がわかるように、言葉を補いながら伝えないといけないんだな』と学びました」と笑う。

思い通りにならなかった経験が“言葉”を育て

Keyword ②

日本一出会いの多い学校

多種多様な実業家・実務家による特別講義を開催。



トヨタ自動車会長 豊田章男氏、EXILE HIRO 氏、TETSUYA 氏、プロテニスプレイヤーの伊達公子氏など、業界の最先端で活躍する講師が講義を行う特別講座も。注目されるために著名人を呼ぶのではなく「成功者のように見える人にも失敗体験があることを生徒に感じてほしい」という思いがあるとか。出会いによって生徒が“覚醒”していく様も見られる。

る。それは、他者に伝えるための言葉だけではない。「自分の中で起きていることにも気づけるようになった」とも話す井出さん。そんな井出さんを見守ってきたコーチの宮谷さんは「彼女が『私は裏方役に回ると、自分の力を活かせるタイプだと思う』と同級生にプレゼンしたことがあった。行動の結果、自己理解も深まっているように見える」と成長を実感する。

エラー&ラーンを繰り返すことで、行動の精度も上がっていく。菊地さんは「1年生の間はとにかく打席に立って、飛んできた球をすべて打つぞ、と意気込んでいるような感覚だった。2年生の今は『選球眼』を高めたい」と話した。

コーチも「実践者であれ」

「生徒たちの成長を邪魔しない」と心がけているコーチたちだが、決して、生徒をほったらかしているわけではない。気になる様子の生徒がいれば「どうしたの?」と声をかけるし、希望があれば、生徒がコーチを選んでマンツーマンで話せるお茶会の場を用意している。

辻さんいわく、コーチは先に手を出さず、生徒たちから言葉が出たり、生徒自身が決めたりするのを、忍耐強く信じて待つこと。その思いに寄

り添い、受け入れることを大切にしているそう(▶Keyword③)。「だから、見守りはするけれど『こうすれば?』とは言いません。壁にぶち当たって、どうにもならない様子でいる生徒を見つけたら、まずは『どうしたの?』と聞く。答えが返ってきたら『君はどうしたいの?』、また返ってきたら『僕に何か手伝えることある?』。この3つの質問を繰り返すうちに、生徒たちは、自然と変わっていく」(辻さん)

教えるのではなく、同じ目標に向かって伴走する役。だからコーチ自身も実践者であることが求められるのだと、宮谷さんは語る。

「この1年間、辻さんには『生徒に学校から飛び出せと言っているのだから、コーチが学校の中に留まっていて、どうするんだ』と何度も言われてきました。だから私も、副業で記者をしたり、ラジオ番組のパーソナリティーをしたりと、時にエラーもしながら、行動の範囲を広げてきた。同じ実践者としてのスタンスをもつことで、指導しなければと焦らず、生徒たちを見守ることができるようになってきたように思います」(宮谷さん)

起きることはすべてが必然。 その意味を考える

生徒の主体性や育つ力を信じて、見守る。授業を休んで活動を行う場合などは報告してもらおうが、基本的には学び方や活動の仕方は任せる。

そのことを徹底するためにも「命の危機に関わること」と「法律に触れること」、「人の成長を邪魔すること」の3つは、「やってはいけない大原則」として全員で認識しあって活動している

Keyword ③

教員の役割は 待つ、寄り添う、受け入れる

教員のことを「先生」とは呼ばない。同じ目標に向かって伴走しながら、いっしょに驚き、考える「コーチ」。



コーチと生徒の関係はフラット。コーチの姿勢として、教壇に立って教えるのではなく、生徒の隣に立ち、いっしょに考え、寄り添うことを大切にしている。

【寄り添うための問いかけ】

- 「どうしたの?」
- 「どうしたいの?」
- 「私に何ができる?」

(▶ **Keyword 4**)。校則と言えるようなものはそれだけだ。それ以外は何をやってもいい。グレーなところは、その都度、生徒たち主体でルールを決めている。

辻さんは試行錯誤の1年間を振り返り「大人には『失敗』に見えるような体験でも、生徒が何らかの学びを得ているのなら、それは『失敗』ではない。生徒自身の捉え方と、『その後』が重要だと気づいた」と語る。学園長の岡田さんが常々「起きることはすべてが必然。それが起きたことの意味を考えるのが大事」と伝えているようで、その言葉がコーチにも生徒にも浸透しているのだ。

さらに辻さんは「自分にコントロールできることなど、たかが知れている、とも思うようになった」と言う。「それまでは『生徒の主体性を大切にす』と言いながらも、大人がコントロールする枠の中で、生徒たちを踊らせていたことに気づきました。思い切って枠を外してみたら、生徒たちは

Keyword 4 /

やってはいけない大原則

野外体験活動にも力を入れているが、生徒の主体性や育つ力を信じるために、やってはいけない大原則を徹底する。



授業に出ない自由はあるけれど、人の授業を邪魔する自由はない。やってはいけないことを明確にすることで、生徒たちを信じ、任せられるようになった。

【やってはいけない大原則】

- 「命の危機に関わること」
- 「法律に触れること」
- 「人の成長を邪魔すること」



想像を超えたアクションを起こしてきた。好き勝手やっているうちに、周りに協力してもらわなければできないと気づいた生徒もいる。生徒のオーナーシップを奪ってはいけないと、つくづく感じた」と辻さん。今は、想定外・板挟み・修羅場という3つの言葉を大切に、不測の事態から生徒をできるだけ“遠ざけない”ようにしている。

本当の意味で生徒たちに任せる。不測の事態が起きることを受け入れる。育てる側に、相当の忍耐と覚悟が必要であるようにも見えるが、辻さんは「やる前から『これはやっちゃダメ』と生徒の行動を止めなくてもよくなった、というのは、実はすごく楽なんですよ」と笑う。

エラーは「特別じゃない」

入学直後「オンラインコミュニティを立ち上げ

たいので8000円出資してほしい」と辻さんに直談判した藤本さんは、1年間さまざまな挑戦を続けながらコミュニティを拡大してきたが、運営に課題を感じ、1年生のおわりに、コミュニティを解散することを決めた。「それが入学してから、最大のエラーでした」と藤本さんは言う。そのときは落ち込んだのかもしれないが、座談会では後ろ向きには見えなかった。

失敗が挫折にならない。なぜなら生徒もコーチも、誰もが当然のようにエラー、すなわち失敗をしているからだ。

「あえて言葉にしなくても、みんながそれぞれのタイミングで、壁にぶち当たったり、自分の生き方に疑問をもって立ち止まったりしているのは、なんとなくわかる。波があるんですよね。それが当たり前だから、僕のエラーは別に『特別なことじゃない』と思う」(藤本さん)

エラーは必ず起きるもの。エラーすることから始まる。その考えが隅々まで根つき、挑戦できる力を育成している。「失敗しないのは『挑戦していない』ということじゃないかとも思う。だから失敗することを、カッコ悪いとは思わない。むしろ、失敗の数だけカッコ良くなれるのかな」と藤本さんは語った。

